

60
ANNIVERSARY

会員随想



記念講演会主賓の高木 菜那さんを囲んで記念撮影

富良野医師会創立 60周年に寄せて

富良野協会病院 院長

古 川 博 之

このたび、富良野医師会が創立 60 周年という記念すべき節目を迎えられましたことを、富良野協会病院を代表して心よりお祝い申し上げます。また、長きにわたり富良野地域の医療を支え、地域住民の生命と健康を守るために尽力されてきた歴代会長をはじめ、諸先輩、会員の先生方に深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

富良野協会病院の 1940 年開設以来、富良野医師会と当院は地域医療を支える車の両輪として、ともに歩んできたと言えます。当院のこの 10 年間を振り返りますと、最も大きな出来事はやはり新型コロナウイルス（COVID-19）感染症です。感染発症以来、地域中核病院として感染患者を受け入れてきましたが、2021 年には発熱者等診療・検査医療機関に指定され、2022 年には発熱外来を設置し、積極的に COVID-19 感染患者の診断・治療はもちろん、ワクチン接種などの感染予防対策にも取り組んでまいりました。一方これらの対応を行う中で院内感染やクラスターに見舞われたこともありましたが、その後、すべての医療機関や介護施設で COVID-19 感染患者を受け入れることとなり、未曾有のパンデミックを乗りきることができました。

これまでも人口減少と高齢化にともなう医療従事者の不足が言われてきましたが、近年特に看護師の不足が深刻化し、2025 年 4 月にはそれまでの 255 床あったベッド数を 199 床に削減せざるをえなくなりました。さらに、病院の経営状態の悪化も加わり、病院も大きな転換点に立っております。これまで貫いてきた「患者を断わらない医療」という安心の要である当院をどのように次の世代へ引き継いでいくかが、私たちに課せられた大きな課題です。

病院経営が苦しい中、1 人ですべての日中の手術に対応していただいている麻酔医に報いるべく自動記録装置付きの麻酔器を購入すべく 2025 年 7 月にクラウドファンディングを行ったところ、3,000 万円近い寄附金が集まり、上記の器機はもちろん、外科手術用の内視鏡機器を購入することができました。寄附していただいたすべての皆様に感謝申し上げます次第です。この経験を通じて、当院が地域の皆様に支えられている病院であることを、改めて強く実感いたしました。

病院と診療所、医療と介護、そして行政や消防をはじめとする地域の関係機関が、それぞれの垣根を越えて協力していくことが、これまで以上に重要になってきており、限られた医療資源を互いに補い合い、地域全体を一つの医療・介護チームとして支えるという視点が必要です。幸い、2024 年 4 月には、富良野メディカルアライアンスが創設され、富良野協会病院と医療・介護に関わる関連施設とのネットワークの要となる組織ができ、2026 年には医師会が中心となり、医療と介護をネットワークでつなぐバイタルリンクへの整備が開始されました。これらの取り組みによって、富良野の医療・介護についてますます連携が強化されていくことは間違いありません。

私は 2025 年 7 月に富良野協会病院に赴任して以来、この地域には、医療機関の規模や立場を越

えて、地域住民のために力を合わせようという強い土壌があることを感じています。それは、60年という長い年月の中で、富良野医師会の諸先輩方が築き上げてこられた何ものにも代え難い財産であると思います。

60周年は、これまでの歩みを振り返る節目であると同時に、次の10年、20年、そして次の世代の富良野の医療を考える新たな出発点でもあります。富良野協会病院も、厳しい医療環境の中、地域の基幹病院としてその責任を果たすとともに、富良野医師会の先生方とこれまで以上に緊密に連携し、この地域に暮らす方々が安心して住み続けることのできる医療体制をともに築いていきたいと考えております。

結びに、富良野医師会創立60周年を改めて心よりお祝い申し上げますとともに、富良野医師会のさらなる発展と、会員の皆様のますますのご健勝、ご活躍を心より祈念し、お祝いの言葉といたします。

富良野医師会 60周年

渋江医院

渋 江 久

富良野医師会 60 周年となりましたが私も上富良野町で父の跡を継いで 50 年目になります。富良野医師会員、上富良野西小学校学校医、上富良野自衛隊駐屯地嘱託医も 50 年ということになりました。本当に長いようであつたという間に 50 年が過ぎたという感じです。

患者さん達とも長い付き合いで父に診てもらった人が私になり、たまに帰ってきていた息子に診てもらい、三代続いて診てもらったと驚いて喜んでいた患者さんもありました。

また、小さかった時に診察した子が大人になり自分の子供、或いは孫をつれて来てくれるのを診た時は本当に嬉しいものです。あの子どもが大きくなったものだとしみじみと思う時があります。

私も後期高齢者となり、少しゆっくりとした生活を、と考えたいのですが、地方医療での医師、看護師、その他のスタッフ等の人手不足の為、どこでも余裕がなく本来の自分の仕事以外にやらなければならない事が沢山あり、少し減らそうと思うのですがなかなか思うようにはいかない状況です。

今までの富良野医師会史を見ますと、会員の皆さんの頑張ってきた様子が良くわかります。現在も皆さん一生懸命頑張っているのですが、このごろの国内の生活状況はさっぱり良くなり医療界の変化も年々厳しくなっているばかりで状況の改善が感じられません。

新しい医療技術の進歩と変化、新しい機械、新薬の開発、予防医学の進歩、医療法の改正、コンピューターの必要性の増加等、新しい知識を習得し、ついていくのが大変な時代になりました。また医療費の増大の為の抑制政策があり、各医療機関の赤字増大の時代となり、どこも経営が厳しく、苦しんでいる医療界となりました。医療環境、労働環境の悪化で以前から言っていました「医は仁術」の心ではやっていけない状況です。あまり経営に気を使わないで患者さんとの医療に専念、集中できるような体制になってほしいものです。

健康診断による早期発見、生活改善による健康維持は重要ですが、患者さんの負担を減らし、病院にかかり易く早めに受診し早期治療出来る環境も大事だと思います。

政府も新しい体制になりましたので国民の生活改善、医療体制の改善がしっかり行なわれるように期待したいものです。

富良野医師会 60周年記念誌に寄せて

ふらの西病院 理事長

松田 英郎

医師会とはどういう組織か

富良野医師会に入会して、この10月で35年になる。思えば、開業した平成3年（1991年）10月に入会してから、早くも35年の歳月が流れた。当時は6歳だった息子も、今は一緒に働いている。この間にあった出来事を振り返り、思いを述べたい。かなり辛辣な表現も含まれるかもしれないが、今後続くであろう富良野医師会の道しるべとなればと思い、記録として残す次第である。50周年記念誌では、古希を迎えた自分について「別の場所でゆっくり過ごしたい」と書いた記憶があるが、今も変わらず富良野の地で患者さんを診療している。ただ、随分年齢を重ねておとなしくなった。

医師会とは、地域医療・保健、救急・災害時の対応、最新医療情報の共有、そして行政に対して現場の医師の声を反映させるための任意団体であり、地域の診療所（開業医）や病院の医師が所属している。

私が入会した当時は、加藤健治郎会長（加藤健先生のご尊父）、田村憲行副会長、新沼竜之介副会長（協会病院院長）という体制であったと記憶している。その後、1995年からは田村憲行会長、高橋尚志・柏木稔暖両副会長が2期を務め、1999年からは高橋尚志会長、柏木稔暖・石澤秀明両副会長が4期を務めた。通常であれば協会病院院長の篠田悠一先生が副会長に就任されるものと思われたが、会長が理事の中から副会長を指名しなかったため、開業医による副会長体制となった。

私自身も2007年から5期にわたり副会長を務めたが、2011年に異変が起きた。突然、石澤先生が来られ、「羽根田俊先生が『松田は年下なのだから、第1副会長を羽根田、第2副会長を松田と入れ替えるべきだ』と進言してきた」とおっしゃったのである。結果として、副会長に明確な順位がつけられることとなった。

1997年から理事として医師会事業に尽力してきたにもかかわらず「おかしい話だな」と思いつつも、甘んじて受け入れた。しかし、話はそれだけでは済まなかった。2015年の役員選挙において、協会病院の組織票により、私は理事選で落選することとなった。あろうことか院長の指示により、協会病院の外科の後輩藤原康博先生に大差をつけられて失職したのである。

その後、2015年からは石澤秀明会長のもと、副会長に羽根田俊先生、印鑰史衛先生が就く体制となった。その後の人事推移については、本記念誌をご覧いただければお分かりになると思う。程なくして羽根田院長は定年退職となり、その後は小山内裕昭院長が医師会長に就任され、協会病院退職後もその体制が継続している。ちなみに私自身も、2023年に“恩赦”を受けたかのように理事職へ再任された。今はおとなしくしている次第である。

開業医の高齢化が進む中、問題となるのは「医師会の役員人事は、地域のバランスを考慮した開業医中心であるべきだ」ということである。センター病院の運営委員会において医師会長が当て職と

なると、さまざまな弊害が生じる。公平公正に会を運営することは非常に難しいことではあるが、先人の知恵が必要であったと感じざるを得ない。

昨今、医療経営を取り巻く環境は厳しさを増している。そうした中で、行政に対して毅然と意見を言える強い医師会でなければ、地域医療が崩壊すると言っても過言ではない。医師には「財政的支援を求めることを口にするのははばかれる」という風潮があるが、それではいけない。医療機関は地域における極めて重要なインフラであり、主張すべきことはしっかりと主張すべきである。健康や医療への投資を惜しむべきではない。行政は何か要請を受けると「医師会の総意がなければ動けない」と医師会を引き合いに出すが、特定の補助金などに偏りながら対応されると、まんまと言いくるめられてしまう。

今後の医師会の舵取り役は非常に大変であると思うが、ぜひ若い会員のエネルギーで、より活発に組織を推し進めていただきたい。富良野医師会の 70 周年に向けた益々の発展をご祈念申し上げるとともに、共にお祝いを申し上げたい。

ひとり旅

内海内科クリニック

内 海 真

1980年（昭和55年）春の旭川医大第3内科の医局会議で決まった新規派遣病院は富良野協会病院。内科医が半年以上も不在だった当時の協会病院、院長の新沼先生を含め外科医が3名のところに、同年7月高砂子、大原両先生が赴任し総勢5名体制となり、3か月遅れで2年目の内海が雑用係?として加わり、私の富良野への旅が始まる。最初の2年間に「北の国から」の放映も開始され、長女も生まれた。その後旭川での勤務を経て、1986年10月に再度富良野へ呼ばれ、出戻り1号となる（因みに2号は小山内先生）。旭川では次女と長男が生まれ家族5名となり、出戻り後しばらくしてからは富良野への旅も終わり、居住地として家も建てた。協会病院では、小児科、泌尿器科、整形外科、耳鼻科、産婦人科・・・と医師も増えていったが、内科としては全般に対応しなければならず、（出張医や他院の）呼吸器や循環器のDrにいろんなこと教えていただきながら日々を送っていたのも懐かしい。消化器内科医としては、内視鏡の手術・手技の普及時期でもあり、開業を決めたあと、ERCP（内視鏡的逆行性胆管膵管造影）～EST（内視鏡的乳頭切開）などがもうできなくなるのかと一抹の寂しさを覚えたのも確かである。

1997年開業したクリニックも来年で30周年を迎える。この期間ひとり旅できたわけでもなく、支えてくれたスタッフ、家族はもちろんのこと、印鑰先生、協会病院をはじめ医師会の諸先生には大変お世話になりとても感謝している。そんななか2021年から長男が週2回の診療に加わり、少しだけ余裕ができ趣味の時間を持てることも多くなった。もともと鉄道旅が好きで、旅程には興味を示さず目的地には最速で着きたい妻とは意見も合うはずもなく、時々ひとり鉄道旅を始めた。最初で最長は、朝一番富良野駅を出発、北海道新幹線経由で東京駅からの夜行列車（サンライズ出雲）で、翌朝に着いた出雲旅行。これに味を占め、ほかに北陸や東北地方も旅したが、サンライズ瀬戸を含め、この夜行列車を利用した3度の山陰・四国地方がやはり個人ベストスリー。もう一つの趣味はサイクリング。以前から天気の良い週末は30～50kmほどの屋外ロードを楽しんでいたが、最近では熊も怖いので楽な旭川の平坦路を選ぶことも多い。一方で、この夏70過ぎのオッサン3人で「しまなみ海道」の尾道から今治、酷暑の中77kmを完走できたのが一番の思い出となった。ということで、体力もまだ持ちそうかなと思いつつ、30周年を迎えるに当たり、長男への体制移行も考えつつ、新しい旅を模索している今日この頃です。



富良野医師会 創立 60周年に寄せて

富良野協会病院 名誉院長

角 谷 不 二 雄

富良野医師会創立 60 周年、誠におめでとうございます。私が富良野協会病院に赴任し、富良野医師会に入会したのは 1997 年 8 月でした。振り返れば、医師会の 60 年の歴史のほぼ半分を会員として過ごしてきたことになります。

私が医師会と大きく関わるきっかけとなったのは、2008 年頃から議論が始まった時間外救急体制の問題でした。当時の富良野の時間外救急は、一次救急については平日が市内の当番医、土日祝日が富良野協会病院、上富良野町では上富良野町立病院が担当し、二次救急が富良野協会病院という体制でした。しかし、実際の運用にはさまざまな課題があり、医療機関の間にも不協和音が生じていました。

そこで医師会に救急対策委員会が設置され、平会員であった私も参加しました。活発な議論を重ねた結果、「時間外救急診療の場を富良野協会病院に一元化する」「平日準夜帯の一次救急を医師会当番医と医師会から派遣された看護師が担当する」という新たな体制が決まり、2009 年 4 月から開始されました。開始に先立ち富良野協会病院で開催した早朝勉強会には、多くの開業医の先生方にも参加していただきました。あれから 17 年余りが経過し、医療を取り巻く環境も大きく変化しました。この救急体制についても、今後あらためて検討する時期を迎えるのかもしれません。

その後、私は理事会の一員となり、長く担当してきた仕事の一つが、富良野市の広報に 2 か月に 1 回掲載している健康コラムです。これまで 75 回にわたり、医学や病気だけでなく、地域の医療体制などについても書いてきました。このコラムとは別に、新型コロナワクチン接種を呼びかける記事を大きく掲載していただいた広報特別号が、道内の自治体広報誌コンクールで最優秀となったことも思い出されます。

医師会報を担当していた縁から、創立 50 周年記念誌の編集にも携わりました。医師会報のバックナンバーを読み、図書館や博物館で資料を調べ、諸先輩から昔のお話を伺いながら 50 年の歴史をたどる作業は、たいへん興味深いものでした。50 周年記念誌は、国立国会図書館からの依頼を受けて納本しており、現在も同館に保存されています。いつの日か 100 周年、150 周年の記念誌を編集する方々が、そこから当時の富良野医師会の姿を知ってくださればうれしく思います。

理事会に参加して間もない頃、医師会という組織の意義を実感した出来事もありました。当時、富良野市内の医療機関で使用された入院患者の紙おむつの処理には多額の費用を要していました。環境省のガイドラインとの取り扱いの違いについて各医療機関が個別に市へ申し入れてもなかなか進展しませんでした。理事会で問題を提起し、医師会として申し入れたところ交渉が進み、取り扱いを変更することができました。個々の医療機関では難しいことでも、医師会という組織としてまとまることで、公的な発言力を持つことができる。そのことを実感した経験でした。

これから2040年を見据えた新たな地域医療構想が具体化していきます。富良野二次医療圏も、区域設定の見直しを含め、病床や医療機能の再編の影響を受けることになるでしょう。そのような時代だからこそ、「地域住民が住み慣れた地域で最期まで安心して暮らせる医療・介護体制」を守るために、医療機関の枠を越えて力を合わせる医師会の役割は、ますます重要になると思います。

富良野医師会がこれまで築いてきた60年の歴史を礎として、これからも地域医療を支える中心的な存在であり続けることを願っています。

No pain, no gain

富良野協会病院 循環器内科

名 取 俊 介

富良野医師会創立 60 周年、誠におめでとうございます。

今私の手元には富良野医師会 40 周年記念誌、50 周年記念誌があります。ここに 60 周年記念誌も加わることになるとは自分でもいささか驚いております。

2000 年に医局の命を受けて富良野に赴任し、途中 3 年半抜けているものの 24 年近くこの地で世話になっているんだと改めて思う次第です。と同時に年も取る（今年で 65 歳）わけだと妙に納得もいたします。だって 3 年前には孫も授かり、今こうして PC に向かい原稿を書いているのも朝の 4 時で、こんな時間に目が覚めちゃうお年頃ですね。では気を取り直して 50 周年誌に寄稿した“脱メタボから避 frailty”以降 10 年の個人的な思い出をいくつか書き下ろしたいと思います。

まさにこの数日（26.9 上旬）、台風やら秋雨前線の影響で各地に大雨の被害が広がっております。被害に見舞われた方々にお見舞いを申し上げます。

数少ない各地の友人、親族に安否確認のメールをしたりしています。2022 年から 2024 年までお世話になっていた福島県いわき市も線状降水帯の影響で川が氾濫しお一人亡くなられたようで、呉羽総合病院 病院長、看護部長、医局長にお見舞いのメールをしたところです。いわき市というのは福島で一番大きな市で（5 市 4 町 5 村が合併して出来た当時は日本で一番大きな市でした。因みに 2 位以下は第 2 位＝札幌市、第 3 位＝芦別市、第 4 位＝紋別市、第 5 位＝稚内市、昭和 41 年当時）、そこがまるごとレベル 4 の警報が出て高齢者には避難勧告が出てましたので、無事を確認できたときは流石にほっとしました。本当に最近の雨、特に線状降水帯は怖いですね。そういえば十勝岳の噴火活動も 9.12 には警戒レベル 3 になりましたが、このまま落ち着いてくれる事を祈ってやみません。

駅前のスポーツ GYM “ふらっと”に強制入隊させられたのが 2008 年の 6 月のことでした。奇跡的に今現在も週 2 回程度通っており体重も 67kg 台で何とか維持できております。水泳（道産子ですものもちろん金槌）、マラソン（走るの大っ嫌いな鈍足小学生でした）、ロードバイク（自転車は普通に乘れてました）、筋トレなど細々とですができるだけ長く勤しみ“避 frailty”を生涯の目標として持続したいと考えております。さらには消防職員やジム友のお陰で全く縁の無かった異世界に飛び込むことも出来ました。そう、“あれ”です。今さらスピード系で勝負は出来ませんので endurance 系をメインにミドル / ロングディスタンスでスタートからゴールまでの 9/17 時間を人生のように様々なアクシデント、ハプニングを楽しみ苦味わいながらやっております。道内でも苫小牧や洞爺湖で大会が開催されておりますし、函館では 2024 年から 2028 年まで（の予定）世界各国から 1,800 人弱が参加して 24

時過ぎまでゴール会場がお祭りのように盛り上がるアイアンマンが行われてますので怖い物見たさで一度観戦してみてその雰囲気を楽しんではいかがでしょうか？ 観ているだけで勇気がわいてくるのでお勧めですよ。今年は裏方として9.13の大会に参加して違った視線で楽しむことができました。おまけで優秀スタッフ賞として盾とお米を頂き、感激しています。

コロナで随分と人の営みも変化しました。人が集う場、機会が随分と様変わりしましたね。リモートでの参加もその一つで現地に行かなくてもいいという事は良いときもあるけど、やっぱりリアルの旅も楽しみたいしライブも生の方が良いですね。2025年に日曜劇場で放映されていた“ロイヤルファミリー”というドラマに連れ添いが沼って確かに面白かったのです。もともと玉置浩二の歌唱力、歌のうまさに惹かれていた彼女は近年コンサートに行ってみたくて言っていました。あまり本気にしていなかったのですが今回のドラマの主題歌も彼が歌っているということもありチケットを買うためにファンクラブにも加入して見事チケットをゲットして札幌のKitaraに去年行ってきました。

なんとビギナーズラックなのか中央列のやや左側、前から2列目18番という奇跡的な席でした。因みにいまやチケットも電子化となっていて顔認証で入場、席も前日に発表されるというもので、年寄りにはチケットも扱いにくい感じがしました。コンサートはもうテレビで観ているような距離でしたし女性ファンは最初の一声で涙という人が多かった、そんなコンサートでした。これに味を占めた彼女のリクエストで今年も5月にKitaraに行ってきました。2回目です。ビギナーズラックはもうないのはわかっていました。今年の席は・・・・・・、最前列の1列目23番、ほぼど真ん中。去年以上の奇跡が待っていました。いやーマジで最高でしたよ。

まだまだいろいろな出来事があり個人的にも激動の10年間でしたが、これからの10年は一体どうなるんでしょうかね。最近は武力を行使する巨大国家や地球温暖化、円安、物価高と暗い話題が目につきますが、なんとか良い方向へ転じて穏やかな日々を過ごせること、そして70周年記念誌を手取ることを祈って、明日からもちょいトレに励みたいと思います。



回想

富良野協会病院 小児科

藤 保 洋 明

富良野医師会創立 60 周年おめでとうございます。

記念誌に寄稿する機会をいただきましたので、これまでの人生や富良野での生活を振り返ってみたいと思います。

私は 1962（昭和 37）年 5 月に旭川市で生まれ、教員だった父親の転勤に伴い、幼少期～小学生時代は鷹栖村 / 鷹栖町・和寒町の農村で育ちました。中学入学時に旭川市に戻り、市内の高校を経て旭川医科大学に進学。1987（昭和 62）年 3 月に卒業して小児科学教室に入局しました。大学病院で 1 年の研修後、医局の人事で国立療養所道北病院（1 年）・深川市立総合病院（1 年 9 か月）・遠軽厚生病院（1 年、結婚）・旭川医大附属病院（2 年、長男誕生）、名寄市立総合病院（3 年、次男誕生）に勤務し、1997（平成 9）年 4 月に 11 年目の医師として富良野協会病院に赴任しました。

この年の大きな出来事としては、長年当院の小児科医療を牽引されていた印鑰史衛先生が 8 月に退職・9 月に開業されたことが挙げられます。後任は旭川医大から角谷不二雄先生が赴任され、両先生の引き継ぎのお手伝いをするのが私の役目でした。この頃はまだ子どもの数が多く、各地で小児科医が不足しており、当院でも外来・入院・分娩立会および新生児医療・夜間や休日の救急医療・院外の乳幼児健診や予防接種などで多忙な毎日を送りました。

これまでの勤務地に比べ、富良野は景色やラベンダーなどの花が美しく、スキー・スノーボードやドラマ「北の国から」の影響もあって観光客も多く、活気溢れて楽しく住める街でした。夏場は病院近くの国道が大渋滞となり、北の峰町の自宅に帰れないこともありました。

子どもの幼稚園通園に伴い妻子の友人が増え、家族も富良野が大好きになりました。本来は数年で他の病院に異動する立場でしたが、医局の人事希望に富良野残留を希望し続けました。冬には病院のスキー教室があり、家族全員で受講しました。そのおかげで、子どもたちは就学前からかなり滑れるようになり、就学後は学年トップクラスの早さでスキー検定に合格し続け、私も富良野スキー学校の 1 級検定に合格することができました。

2007 年には待望の新病院に移転できたのも嬉しい思い出です。

2011 年には子どもたちの進学に伴い、家族が分散し、私も単身生活になりました。

2015 年に突然の医局の指示で遠軽厚生病院への異動になり、定年まで勤務するつもりでしたが、2 年後に大学の医局員不足で一時的に同院が減員されることになり、私が再び富良野に戻りました。最近では、以前に診療していた子どもが親になって、その子どもを診療する機会が増え、感慨深いものがあります。

話は変わりますが、この 30 年で小児科医療は激変しました。小児科で診る疾患は感染症が圧倒的に多いのですが、各種迅速検査や LAMP 法などで原因ウイルスやマイコプラズマなどを早期に特

定できるようになりました。特にインフルエンザ検査と治療薬（タミフル）の登場でインフルエンザの診断・治療ができるようになったのは衝撃的でした。定期予防接種の種類や接種回数が増加し、麻疹・水痘・細菌性髄膜炎・ロタウイルス胃腸炎などが激減しました。胎児エコーによる出生前診断が発達し、心疾患を含めた重症先天疾患児が大病院で分娩されるようになり、当院のような地方の病院で突然出生することがほとんど無くなりました。新生児スクリーニングにより、先天性の聴覚障害や希少な代謝・免疫疾患等も早期診断・治療介入できるようになりました。その一方で、食物アレルギーの診療や発達障害児への介入の必要性が増加しています。少子化も深刻で、特に分娩数の減少、学校・保育所の減少（統廃合）が続いているのは残念です。それでも当院は、昨年度までは他の地域センター病院に比べて患者数が多かったのですが、今年度は減少しています。

2026年3月に北海道社会事業協会の規定で定年に達しましたが、4月からも旭川医大小児科医会（医局）所属の常勤嘱託医として勤務を続けています。あと何年勤務できるかわかりませんが、今後も富良野の小児科医療にできるだけ貢献したいと考えています。

創立 60周年を祝して

富良野協会病院 消化器内科 副院長

西 川 浩 司

富良野医師会 60 周年おめでとうございます。富良野協会病院の消化器内科西川です。

今回の投稿に際し、富良野医師会 50 周年の原稿を見直しておりますと、ロードバイクのことを書いていたようです。最近では 1 年に 1 度乗れば良いかな程度で意欲が先細っております。

この 10 年で、医療を取り巻く環境は激変しております。まずは、治療内容が目まぐるしく進化、変化している点です。当科が関係する癌患者における化学療法や炎症性腸疾患に対する advanced therapy 薬剤が劇的に増加し、ガイドラインさえも臨時のステートメントを逐次出さざるを得ない状況で、薬を覚えることもこの歳になりますと厳しくなっております。

また、医療を取り巻く環境では、病院・医院の閉鎖もちらほら耳にし、食料費、光熱費の増加に対して診療報酬は雀の涙ほどのアップでしかありません。

また、特に富良野においては外国人観光客の増加に伴う診療の煩雑化が顕著となってきております。言語や文化の違いもあり、一筋縄では行かない問題も山積しております。

2026 年 4 月より富良野協会病院の副院長に任ぜられましたが、働き方改革を含め医療環境を取り巻く状況に何とか対応し、富良野医療圏の発展のために努める所存です。今後 10 年、更なるスピードで医療内容及び環境は変化するものと思われ、5 年後の自分の状況を想像することすら困難な状況で、富良野医師会 70 周年記念にどんな原稿を書けるのかは想像もつきません。しかし、どんなに医療環境が変化しようとも、医師としてのスタンスは研修医時代から変わらず、一人一人の患者に真摯に向き合う医療を常に心がけていきたいと思っております。

「地域医療」はどこへ？

富良野協会病院 外科 副院長

星 智 和

富良野医師会の創立 60 周年にあたり、長きに渡り地域医療を支えてこられた多くの先生方のお働きに敬意を表します。

富良野協会病院に勤務して、富良野医師会に加入して1年半が経過した。これまでの勤務を通して、地域医療に対しての個人的な関わりなどについて記載させていただく。

旭川医科大学を 1989（平成元）年に卒業して、第二外科に入局して外科医としての生活が始まった。調べてみるとその年の富良野市の人口は 29,000 人とのことである。研修医制度もなく、比較的多くの同期が大学の各医局に入り研修が始まった。朝夕の抗菌薬点滴、ルート確保、採血結果によってその日の輸液を作成して投与するなど、働き方として時間的な効率はよくなかった。大学病院でも症例数や医療費などに追われることもなく、手術、術後管理、ターミナルケアから看取りまで経験できて、やり甲斐を感じる時間であった。医局制度により地域への医師派遣が維持されており、地域医療の崩壊などは感じられなかった。

1991 年にふらの西病院が開院し、医局の先輩が設立したことから当直での出張やその後には外来も出張で手伝わせていただくこととなった。

2008 年（富良野市の人口は 24,000 人）、4 月から旭川医大第二外科は富良野協会病院に外科医を派遣することになった。医局長をしていた時であり、2007 年秋に協会病院の院長、事務長、市長さんなどが医局に来られて、北大からの派遣が無くなるので派遣を依頼したいとのことであった。地域医療崩壊を感じる出来事であった。医局員の多くの意見は、もっと大きな施設への派遣を検討すべきという派遣への反対意見であった。ふらの西病院への外来出張時や週末に協会病院の様子を見て（今なら不審者となるのだろうか）患者数などを確認し、教授の地域医療を守るために派遣を検討するようというご意向もあり、派遣をする方向にて調整をした。医局員の人数も限られた中で何とか調整して、派遣をすることができた時には安心感とその後の不安感の両者が入り混じった感じになったことを覚えている。

2025 年（富良野市の人口は 19,000 人）4 月、縁があって医局から富良野協会病院勤務について話があり、勤務することになった。今 1 年半が経過して、医療体制の変化も含めて、これからの地域医療の難しさを感じている。

医師として平成、令和と過ごしてきた。医療の進歩は著しい。消化器外科医として術者となったのは開腹の胆嚢摘出術だった。その後には腹腔鏡下胆嚢摘出術が導入され、癌の手術ではまだ拡大手術がされており、開腹手術での経験も積むことができた。その後に腹腔鏡手術は癌の手術へと広がった。

手術では、外科医の経験数が合併症率の低下や予後改善に関与すると言われている。外科以外

の多くの治療においても医療は高度化して専門化している。専門としている医師の治療が求められるが、どこでも、いつでも全ての疾患治療において専門の医師の対応というのは困難である。

癌の手術などは今後、ロボット手術で集約化され、地域病院では扱われなくなるであろう。地域で行う外科手術は、緊急性のある、開腹での対応となる疾患なのかもしれないが、そのような手術では若手は術者を希望しないであろう。地域での外科はどのように対応すれば良いのか、答えを出すのが難しい。

広大な医療圏、人口減少、研修医制度、大学の医師派遣の人的余力の低下、医師を含めた働き方改革、メディカルスタッフの確保困難、病院の経営困難。地域医療を維持することは難しくなっていくと思われる。病院のどの機能を残し、どこを削減し、持続できる体制を地域とともに考えていく必要があるのだと感じる。

自分にできることは限られているが、やれる範囲での対応を頑張れるように勤務をしていきたい。今後とも宜しくお願い致します。

富良野で産婦人科医として 最後のお仕事

富良野協会病院 産婦人科

石川 雅 嗣

62歳で富良野協会病院に着任し、来年、古稀（70歳）になります。着任時とあまり変わったという自覚はありませんが、日々健康のため色々取り組んでいます。

□毎日散歩（通年）と自転車（春から秋まで）で5km以上は移動すること。

ウォーキングアプリを利用して雨の日も朝4時半から活動開始です。当然傘は必需品です。突然の雨、カラスの頭タッチ予防、杖代わりになるかも（将来）。富良野では朝散歩をしている人が多いです。ジョギングの方、犬の散歩もいます。朝の散歩で驚いたことがあります。半分以上の方が車道を歩きます。旭川で30年以上働いていましたが、旭川には車道を歩く習慣はありません。富良野の歩道はデコボコが多くて歩きにくいのと、早朝に走っている車が少ないからかもしれません。

□アルコールを殆ど飲まなくなった。

前任地の遠軽（厚生病院）では住宅から病院まで100メートル。殆ど毎日ビール350ml缶を3～4本飲むと1日が終わる感じです。富良野に来てすぐに新型コロナウイルスのパンデミック。また住宅から病院まで1キロメートル。最初は産婦人科堀先生もお産当番をしていたので、3日に1度はビールを飲んでいました。現在、私（石川）がお産当番を月に25日位行っており、その日は全くビールを飲みません。時間外は自家用車で病院に向かいます。サッポロノンアルコールビールプレミアム500ml。これがうまい!! 1日1本飲んで寝てしまいます。医師会の新年会には毎回参加していますが、自家用車で新プリンスホテルに行くので当然ノンアルコール宣言です。

□食事は質素で安価でも栄養価が抜群!

8年ほど前から朝食は納豆オムライスにはまっています。下準備もなく卵を2個焼くだけです。半分は朝食用、残りは昼食のおかず。その他に冷凍ものを追加して朝食と昼の弁当を作ります。卵は1日2個以上食べると寿命が延びるというデータがあり、厚生労働省も2015年に卵の摂取制限をなくしました。健康な成人であれば、納豆は毎日1パック（約50g）を目安に食べることが安全ですが、ビタミンA・D・B12・Cとヨウ素が不足します。毎日納豆1パックと卵2個以上が健康寿命の秘訣と考えています。

□必要とされているなら職務を果たすこと。

やはり社会から必要とされていることが健康の秘訣ですね。現在私（石川）がほぼ独りでお産と帝王切開を行っています、自分も患者さんも満足のいく結果を出していると思います。健康であればいつまでも続けたいです。

60周年記念に寄せて

富良野協会病院 泌尿器科

沼 田 篤

富良野医師会創立 60 周年おめでとうございます。私も今年、還暦を迎えました。

私は 2009 年 4 月に富良野協会病院に就職し、2026 年で 18 年目となり、最も長い勤務地となっています。当院赴任前は、旭川医大で 10 年間勤務しましたが、手術についてまだまだやり足りない感じがあり、渡邊先生が富良野から医局に戻るタイミングで、小山内先生・山口先生のもとで指導して頂こうと、富良野勤務を希望しました。

その頃の当科は、まさに激務であり、大学時代にはグループのトップで働いていたのが一気に 1 番下の身分となりたいへんでした。基本的に手術は一番若い医者がやるのが当院のしきたりで、沢山の手術を経験させてもらいました。とくに 2009 年度～ 2011 年度は毎年前立腺全摘が 20 件（執刀医は 3 人で交代で）、膀胱全摘 5 件（すべて執刀）、腎摘・腎尿管全摘 10 件（すべて執刀）させてもらいました。ときには、前立腺全摘または膀胱全摘を 5 週間くらい連続で行い、体はクタクタなはずなのに、気持ちは高ぶって毎日がお祭りみたいな気分だったことを記憶しています。自分の手術の転機となったのは、この 3 年間ではなかったかもしれませんが、前立腺癌の膀胱浸潤で、連日、血尿・膀胱タンポナーデで苦しんでいた患者さんの膀胱全摘を執刀させてもらったときです。小山内先生との手術でしたが、開腹して膀胱の裏のダグラス窩が意外にも癒着しておらず、尿道まで指が入ったので、ほぼ手探りで側方靱帯と前立腺と恥骨の間のレチウス腔を挟んでは切り、挟んでは切りして膀胱前立腺を摘出しました。おかげで、後輩のまえだちで開腹の膀胱全摘、前立腺全摘ができるようになりましたが、最近はロボット手術がメインとなり、富良野の開腹手術は鳴りを潜めてしまいました。

肉体的な負担より精神的な負担が大きいのは、透析でした。富良野勤務まで透析について一切触れたことのない状態での出発でしたし、透析の管理は合併症の管理であり、これまで泌尿器科医として教育を受けてきたことが通用しない領域でした。とくに循環器系、血管外科系は判断が難しく、常勤医がいない、さらには陸の孤島的な当院でトラブルが発生したときの対応のストレスは大きいです。定期の心臓エコーや血管エコーを行い、早期発見、早期対応を目指していますが、突然に発生するシャントトラブルなどには対応力が試されます。また、大学から派遣される後輩たちは透析の経験がなく、ほぼ毎年交代となります。自分も定年まであと数年であることを見越して、沼倉教授には腎臓内科に打診して頂いていますが、人手不足を理由に新たな派遣の話はまとまっていません。小山内先生には、当院退職後も月・金で外来を手伝って頂いていますが、外来中に透析室、エコー、救急、手術室などからのコールもあり、正直しんどいときもしばしばあります（外来中に透析室、救急、術場から同時コールもありました）。定年まであと数年、悲観しても改善しませんので、何とかなるだろうと、楽観的に考えています。

理事会のあとに始まる、 もう一つの医師会

医療法人カワムラメディカルかわむら整形外科

川 村 大 介

「医師会の理事会は何を話しているのですか？」時々そんなことを聞かれる。

もちろん、理事会では地域医療の課題、行政との連携、救急医療、在宅医療、医療介護連携など、真面目な議題が並ぶ。富良野地域の医療をどう守っていくか、限られた医療資源をどう活かしていくか。どれも重く、簡単には答えの出ないテーマばかりである。

しかし、私が密かに楽しみにしているのは、その「あと」である。理事会が終わると、まるで学生時代の部活動が始まるかのように、自然といつもの顔ぶれが集まる。小山内会長、加藤副会長、古川富良野協会病院院長、白田上富良野町立病院院長、北の峰病院の久保院長、そして私。

年齢も立場も、それぞれ背負っている病院も違う。それぞれの病院では、人手不足や経営、救急、働き方改革など、誰もが簡単には口にできない悩みを抱えている。それでも、この時間だけは肩書きを少し横に置いて、一人の医師として、一人の仲間として笑い合える。

この「部活」の主将は、もちろん小山内会長である。小山内先生ほど正直な人を私はあまり知らない。嘘がつけない。いや、つこうとしても顔に全部出てしまう。そんな人柄だからこそ、みんな安心してついていくのだと思う。真面目な医療の話をしていたかと思えば、いつの間にか美味しいお酒の話になり、気が付けば全国の素晴らしいホテル談義になっている。「そこは一度泊まってみたいね。」そんな一言で、全員が「じゃあ今度行きますか」と本気で盛り上がる。この脱線の仕方が、実に心地よい。

その裏方を毎回黙って引き受けてくださるのが加藤副会長である。お店の予約はいつも完璧。気が付けば席も料理も全部整っている。誰も「予約しましたか？」とは聞かない。聞く必要がないのである。きっと加藤先生がやってくれている。そんな安心感がある。そして何より、加藤先生は気持ち若い。年齢の話になると誰よりも笑い、誰よりも新しい話題に興味を示す。実年齢はともかく（笑）、精神年齢だけなら間違いなくこのメンバーで一番若いのではないだろうか。

古川先生は、私たちから見れば雲の上のような存在である。地域の中核病院を率いる院長であり、本来ならもっと威厳があってもおかしくない。ところが、私たちが他愛もない話や、どうでもいい冗談で盛り上がっていても、いつもニコニコしながら聞いてくださる。時々笑いながら一言だけ鋭いコメントを入れる。その一言で、また全員が笑う。あの包容力は本当に見習いたい。

白田先生は、上富良野町立病院を文字どおり一人で支えている。その責任の重さは計り知れない。それなのに、時々「今度は上富良野でやりましょう」と楽しい会を企画してくださる。美味しい料理、美味しいお酒。そして楽しい時間。ただ、不思議なのは、宴も終盤になると白田先生はいつも静かになり、気が付くと眠っていることが多い。「白田先生、寝てますよ。」誰かがそう言うと、本人は何事もなかったかのように目を覚ます。ご苦労様である。

そして一番若い久保先生。私は親しみを込めて「クボちゃん」と呼んでいる。若いのに本当によく

気が付く。誰かのグラスが空けばすぐ気付き、席順にも気を配り、話題にも自然と入ってくる。富良野医師会には欠かすことのできない存在である。若さとは年齢ではなく、周りを見る力なのだと教えられる。

そして私はというと、この時間を毎月心待ちにしている。診療を終え、手術を終え、病院ではいろいろな問題が起こる。思うようにいかない日もある。悩みが消えることはない。それでも、この部活のような時間があるから、また来月も頑張ろうと思える。医療連携というと、紹介状や会議などが思い浮かぶ。もちろんそれらは大切である。しかし、本当に困った時に電話一本で相談できる関係は、紙の上だけでは生まれない。「先生、それならうちで診ますよ。」「いつでも電話ください。」そんな言葉が自然に出てくるのは、お互いの人柄を知っているからであり、一緒に笑った時間があるからだと思う。

富良野地域の医療と介護を守るためには、制度も予算も必要である。しかし、それ以上に必要なのは、人と人との信頼なのかもしれない。理事会で真面目に議論し、そのあとに思い切り笑う。この何気ない時間こそが、富良野医師会の一番の財産ではないだろうか。創立 60 周年。先輩方が築いてくださった歴史の上に、私たちは立っている。願わくは、この「理事会後の部活」が 70 周年、80 周年になっても、形を変えながら続いていてほしい。富良野の医療を支えているのは、会議だけではない。笑顔のある一杯のお酒と、「また来月ね」と言い合える仲間たちなのだと思う。

